

第15回

非戦・平和展

大阪空襲で母弟を失った伊賀孝子さん。「戦後はまだ一刻も刻まれた加害と被害の記憶」 山本宗輔写真集より

戦後七十年ー歴史の検証と念仏者の責務

原爆の図第2部 火：丸木位里・俊

真宗大谷派
東本願寺
shinshu Otani-ha

開催にあたって

本年は、戦後70年という節目の年を迎えます。70年前に私たちは、戦争でいのちを奪い、奪われることの悲しさ、愚かさ^{おろ}を、身をもって知ることとなりました。そして、二度と過ちは繰り返さないという誓いとしての「平和憲法」を大切にしてきました。

しかし、敗戦直後から朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東紛争など世界各地で砲火の止む時はありません。今日、私たちに直接かかわる事件としての戦争は終わっているかのように見えます。戦争を生み出したのは、政治・経済の仕組みにとどまらず、私たちの価値観・考え方であり、基本的には今にいたるまで変わっていないように思われます。

この時に当たって、あらためて戦争でいのち奪われた全ての人たちに思いを馳せ、非戦を誓うべく「全戦没者追弔法会」を厳修いたします。

私たちの宗門は、明治期以降、宗祖親鸞聖人の仰せになきことを仰せとして語り、戦争に協力してきました。侵略戦争を「聖戦」と呼び、仏法の名のもとに、多くの青年たちを戦場へと送り出しました。そして遺族のみならず、アジア諸国、とりわけ中国、朝鮮半島の人々に、計り知れない苦痛と悲しみを強いてきました。さらに、非戦を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされた僧侶たちを見捨ててきました。

これらに対する懺悔^{さんげ}の思念を旨として、宗門は1995年に「賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまない」（「不戦決議」という誓いを表明しました。

今日、宗教的原理主義によるテロリズムや民族的な排外主義など、宗教や思想が戦争へ国民を駆り立てる道具として利用されようとしています。紛争や戦争がグローバル化し一国にとどまらない問題となり、そのことが「集団的自衛権」という軍事行動への正当性を与えようとしています。こうしたことを踏まえ、私たちはどのようにこの問題を考え、どういう姿勢を持ち、行動をすればいいのか明確にしていかなければなりません。現在こそ、過去の戦争の歴史を直視し、戦争の本質を検証することによって、再び過ちを繰り返してはならない決意を、一人ひとりが心に刻みなおさなければならないと思います。そのような思いから、本年の法要のテーマを「戦後70年—歴史の検証と念仏者の責務—」と決めました。

あらためて現代社会における宗門存立の意義を問い、真に人類に捧げる僧伽^{さんか}の回復という使命において、抜き差しならない危機の時代の中で、平和への歩みが共々に始まることを願います。

2015年3月

真宗大谷派宗務総長 里 雄 康 意

原爆図

丸木位里

丸木 俊

わたくしたちは原爆でおじをうしなしました。めいも二人も死にました。妹はやけどをし、父も半年後になくなりました。知人友人をたくさんうしなしました。

位里は三日目に東京からはじめての汽車で、俊も続いて広島へ入りました。爆心から二キロちょっとの所に、わたくしたちの家が焼け残っていました。

けれど屋根もかわらも窓も、台所のなべもはしも茶わんも、みんな爆風で飛んでしまっておりませんでした。それでも家は焼け残っていたものですから、大勢のけが人がたどりついて家中いっぱい倒れていました。

けが人を運んだり、死んだ人を焼いたり、食べ物を捜して歩いたり、焼けトタンを拾って屋根にのせたり、屍の臭と、はえとうじの中を原爆にあった人と同じように、さまよい歩いておりました。

九月の初めころ東京に帰り、戦争の終わったということがはっきりわかりました。広島では戦争が終わろうが終わるまいが、考える力も失ってしまっていたのです。

原爆の図を描き始めたのは三年もたってからのことです。

自分も裸になって当時の姿を思い起こして描き、原爆のことならと、モデルになってくださった人々。

十七才の娘さんには十七年の生涯があった、三つの子には三年の命があった、と思うようになりました。絵の中にはデッサンも合わせて九百人ほどの人間像を描きました。たくさん描いたのだと思いました。けれど広島でなくなった人々は二十六万人なのです。広島の人々の冥福を祈り、再び繰り返すな、と描き続けるならば、一生かかっても描きつくすことの出来ない数であったと気がつきました。絵でさえも一生かかっても描ききれない程の人の数が、一瞬間に一発の爆弾で死んだということ、長く残る放射能、いまだに原爆症で苦しみ死んで行く人のこと、これは自然の災害ではない、ということ。

わたくしたちは描きながら、その絵の中から考えるようになりました。

『画集 原爆の図』 発行：財団法人 原爆の図 丸木美術館



原爆の図 第2部《火》 1950年 屏風四曲一双 縦1.8m×横7.2m

火 第二部

ピカッ。青白く強い光。爆発、圧迫感、熱風

——天にも地にも人類がいまだかつて味わったことのない衝撃。次の瞬間に火がついた。

めらめらと燃えあがり、広漠たる廃墟の静寂を破って、ごうごうと燃えていったのであります。

うつぶせて家の下敷きになったまま失心した人、気がついて脱け出ようとして、紅蓮（ぐれん）炎につつまれていった人。



ガラスの破片がざっくりと腹につきささり、腕がとび、足がころがり、人々は倒れ、焼け死んでいきました。

倒れた柱の下敷きになり、子どもを抱いたまま、母親は逃れ出ようとあせりました。

「早く早く」

「もうだめです」

「子どもだけでも」

「いいえ、あなたこそ逃げてください。わたしはこの子と死にます。路頭にまよわすだけですから」

母と子は助け出そうとする人の手をふりきって、炎にのまれていきました。



丸木 位里



1901年、広島の太田川のほとりの農家の長男として生まれる。田中頼璋、後に川端龍子らから日本画を学ぶ。青龍展などに意欲的に出品を続けながら水墨画に抽象的表現を持ち込み、独自の画風を打ち立てる。戦争前後は戦争に批判的なグループ、美術文化協会、前衛美術会などで日本画の旗手として活躍する。戦後は現代日本美術展、日本国際美術展などに雄大で繊細な水墨画の発表を続け、从展に毎年、俊との共同制作を出品。1995年10月19日午前11時15分、自宅にて、94歳の生涯を終える。



丸木 俊

1912年、北海道雨龍郡の寺の長女、赤松俊子として生まれる。女子美術専門学校で洋画を学び、二科展に出品する。戦前はモスクワ、ミクロネシアに長期滞在し、スケッチ多数を描く。1941年に位里と結婚し、美術文化展、前衛美術展、さらに女流画家協会展に精力的に出品を続ける。数多くの絵本を手がけ、「日本の伝説」でゴールデンアプル賞、「おしらさま」「つつじのむすめ」「ひろしまのピカ」など民話、創作、記録のあらゆる分野の絵本で数々の賞を受ける。2000年1月13日、敗血症による多臓器不全のため87歳で生涯を終える。



写真展 『戦後はまだ… 刻まれた加害と被害の記憶』



私たちが知らないことは、まだ山のようにある。
戦後70年、戦後生まれの世代に、共有されていない戦争の実態。
70人の戦争体験者が語る実体験。
写真がとらえた記憶のヒダ。

著者からのメッセージ

わずか70年前に敗戦を迎えたアジア太平洋戦争。日本人の死者だけで310万人に及ぶ。

日本軍が勝手に攻め入って占領したアジアや太平洋各地で亡くなった人の数は、いったいその何倍になるのか。私がこの写真集で紹介できるのは、わずか70人ほどの戦争体験者の個人史だ。しかもその一部に過ぎない。「戦後生まれの日本人が権力を掌握したら日本は危険だ」とは、シンガポールの首相を務めたリー・クアンユー氏の名言。「戦争の定義」を持ち出し、加害者責任をあいまいにする前に、戦後生まれの私たちは、個人史から学び未来に継承しなければならないことがたくさんある。「加害と被害」の個人史に通底するのは、天皇を神とした洗脳教育の怖さ。一人一人のもろさ。国と戦争指導者の無責任体質。戦後70年。私たちの社会の本質は変わったのだろうか。



プロフィール

山本宗補 やまもと・むねすけ

1953年長野県生まれ。フォトジャーナリスト。日本ビジュアル・ジャーナリスト協会（JVJA）会員。85年からフィリピン、88年からビルマ（ミャンマー）軍事政権下の少数民族や民主化闘争を取材。日本国内では「古い」と「戦争の記憶」のテーマで取材。「3・11」の翌日12日から福島県に入り、広河隆一氏らフリーランスの仲間6人で原発周辺での放射能汚染の実態を伝え、原発事故と大津波被災地に通い続ける。

『戦後はまだ… 刻まれた加害と被害の記憶』（彩流社）『鎮魂と抗い 3・11後の人びと』（彩流社）『3・11 メルトダウン 大津波と核汚染の現場から』（凱風社）他多数

●シベリア抑留後、戦犯管理所に 金子安次さん
1920年（大正9年）、千葉県生まれ
「家族には言えない『罪』」

金子安次さんは、家族にも言えない日中戦争での体験を語ってきた数少ない元日本兵の一人。

入隊から1年後。1941年秋頃の戦闘では、「自分の子どもを見るたびに思い出す、生涯忘れることができない」罪を犯した。家に隠れていた女を古参兵が強姦しようとしたが激しく抵抗した。女を井戸まで引きずって行き、古参兵の命令で金子さんが足を持ち、2人で女を井戸に投げ込んだ。女と一緒に隠れていた男の子が、「マーマー」と井戸の回りを駆け回り、台になるものを持ち出し、母親のあとを追って井戸に飛び込んだ。

「まさかと思った。何をするかと思って見ていただけだった。あれは忘れることができない」。金子さんの目は潤んでいた。「苦しむのは可哀想だ。手榴弾を投げ込んでやれ」。古参兵に命じられるまま、金子さんは手榴弾を井戸に投げ入れたという。

日本軍は残虐行為の限りを尽くしたが、中国は戦犯を人道的に扱った。

1956年。中国政府の寛大な計らいで1人の戦犯も処刑せず不起訴に。



●日本軍による性奴隷被害を名乗り出た ナルシサ・クラベリアさん
1930年、フィリピン・ルソン島生まれ
「父は拷問死、弟は刺殺され」

フィリピンでは、ナルシサ・クラベリアさんのように、家族を目の前で殺害された日本軍「性奴隷」被害者が多いのが特徴だ。フィリピンでは、1992年に元「性奴隷」被害者の正義と解放を求めた、「リラ・ピリピーナ」が設立され、各島から名乗り出た174名のロラ（おばあさん）と呼ばれる被害者が認定されている。ナルシサさんが名乗り出たのは1993年。

1941年12月の日本軍のフィリピン上陸後、生活の急変はなかったが、43年頃に日本軍が町に来た。「父を縄で高床式の床下の柱に縛り拷問した。バヨネタ（銃剣）で皮膚を切って剥がし、上半身が斬り刻まれた父は血だらけ。痛い」と泣き叫んだ。家の中から母の叫び声が。階段を駆け上がると、「母がスカートをはぎ取られ、1人の日本兵が覆い被さっていた」。5歳と7歳の弟妹が日本兵を叩こうと棒を手にしたら、日本兵が銃剣で弟妹を刺し貫いたと話した。

ナルシサさんと姉2人は、町の日本軍駐屯地に連行され監禁された。

ナルシサさんに日本兵が直接謝罪したら許せますかと尋ねてみた。「私の中で私に許しを請うても私が許せるわけではない。被害者は私ひとりだけではありません。フィリピン、アジア全域に無数の被害者がいるわけで、正義が回復されるべきです」。





●大阪空襲で母弟を失った 伊賀孝子さん

1931年（昭和6年）、大阪市生まれ

「なぜ私は生かされたのか」

当時13歳で、浪速区で両親と7歳の弟の4人暮らし。空襲警報後、「西の空が真っ赤に染まり、父が逃げようと言って家族4人そろって玄関を出た瞬間」、焼夷弾が間近に落ちた。弟は焼け焦げる寸前で、別の防火用水に浸かっている、姉弟は「無言で向き

合った」という。母は焼夷弾2発の直撃で、防空壕の階段に腰掛けるように死んでいたと後で聞いた。水膨れの弟は2日後に息を引き取った。父も大火傷を負い、伊賀さんは顔や両手足の一部に大火傷。顔のケロイドは今では目立たないが、物がしっかり持てるようになるには10年かかった。

「私は遺族と障害者の両方。戦災孤児の気持ちもわかる。あの火の中で消された人は訴えることができない。生き返らすには死没者名簿を作るしかない」。

1991年に開館した「ピースおおさか」（大阪国際平和センター）は、大阪陸軍造兵廠跡地の一角に建つ。中庭に建てられた慰霊碑、「刻ときの庭」には、現在8942名分の名前が刻まれている。

「ここは加害の場所であり、被害の場所です。資料館で加害の歴史を展示するのはここしかないんです」。



●泰緬鉄道・捕虜墓地搜索隊通訳 永瀬隆さん

1918年（大正7年）、岡山県生まれ

「日本人は良心を確立したか」

日本軍のジュネーブ条約に反する強制労働により9万名もの夥たしい犠牲によって建設された「^{たいめん}泰緬鉄道」。戦後、連合軍が埋葬場所を捜し出す作業を手伝ったのが永瀬隆さんだ。

ある時、水責め拷問の通訳をした。鼻と口を覆ったタオルの上から腹が膨れるまで水を注ぎ続ける拷問だ。「マザー！マザー！」。永瀬さんと同年齢の若い兵隊がうめき苦しんだ。その声は今もって忘れられないと永瀬さんは話す。

戦後の連合軍の捕虜墓地搜索隊は、21日間で155カ所の墓地を調べ、約1万名以上の捕虜の姓名が判別できた。寝食を共にして搜索に協力した永瀬さんに対する憎悪と軽蔑の視線が変わった。この搜索隊への参加が、永瀬さんの戦後の生き方を決定づけた。

戦後、故郷に英語塾を開設。1964年から2009年までに135回の現地訪問を果たした。現地の学生への奨学金支給、鉄道建設による全ての犠牲者の冥福を祈るクワイ河平和寺院を建立するなど多方面で貢献した。
2011年没

●爆心地近くで被爆した生存者 児玉光雄さん

1932年（昭和7年）、広島県生まれ

「よくこれで生きている」

爆心地から約870mの広島一中教室内で被爆した児玉光雄さんは、被爆直後の嘔吐、脱毛、紫斑、40度を超える高熱などの急性原爆症を脱してから、60歳になるまで大きな病気を患うことはなかった。だが、直腸がんが60歳で見つかったからは、様々ながんの発病が続いている。

8月6日の広島一中は、2～3年生は学徒勤労動員で留守。1年生300人が市役所裏で建物疎開作業する班と教室の自習班に別れた。校庭で誰かがB29が来たぞと叫び、窓の外を見た児玉さんが「B29が落下傘を落としたぞ」と言った。児玉さんが窓側から仲間の輪に移動した瞬間、原爆が爆発した。木造校舎の下敷きになり、熱線の直撃は免れたが、放射線がさえぎられたわけではない。

運命は紙一重。即死の仲間も見したが、身動きできない仲間数人を、材木を自力で動かして救出した。プールで見た火傷を負った男女生徒の惨状が脳裏にこびりついた。

児玉さんによると、広島一中の同級生19名が生き残ったが、6人は40歳代までに病死した。児玉さんも含め結婚した7人には子どもがいない。今も健在なのは児玉さんともう1人だけ。



●戦災障害者の援護法を求める 杉山千佐子さん

1915年（大正4年）、愛知県生まれ

「内地も戦場と認めて」

杉山千佐子さんは、小さい頃からおてんばで、何でも観察するクセがあったという。小学生時代は台湾の台北で過ごした。10代後半から名古屋空襲で左目を失う重傷を負う29歳までは、名古屋大学解剖学教室助手として働いた。

敗戦から30年余りが経ち、57歳の杉山さんは、空襲による戦災障害者に対して国の救済を求める活動を1人で開始した。「全国戦災障害者連絡会」を設立し、「内地も戦場と認めて」と、援護法の制定と全国的な被害調査を政府に求める運動を始めた。

国会では、1989年までに「戦時災害援護法案」が14回提出されたが全て廃案に。

「援護法を作っておけば、国民も軍隊と同じように補償すべきであるということが決まってきて、戦争をやろうと思っても、どれくらい金が必要になります。この前の戦争のように、国民を塵芥のように使って使い捨てすることができないようになる。私の時に実現できなくても、世の中にこういうことを言い続けた女がいたと誰かが引き継ぐ。反戦運動の根本だと思う」。

超党派の「空襲被害者等援護法（仮称）を実現する議員連盟」が設立したのは11年6月。援護法ができないまま、戦後68年が過ぎた。2013年9月の誕生日で、杉山さんは98歳になる。



— 非戦・平和の願いをともに —

真宗大谷派は、七月一日に「安倍晋三内閣による集団的自衛権行使容認に対する反対声明」および「宗務総長「メント」を発信しました。

その声明の中に「日本国憲法」を、悲惨な戦争を背景に生まれた、非戦に向けた日本国民の誓いであるとともに、国際社会に恒久平和を呼びかける願いの象徴であると受けとめています。」と書かれています。

このような声明を宗派として発信するのは、明治期以降の私たちの宗門の歴史と深い関係があります。

「不戦決議」で表明した、「(戦争という) 惨事を未然に防ぐ努力」とはどういうことか、

明治期以降の私たちの宗門の歴史に学び、宗祖親鸞聖人の教えをいただく私たち一人ひとりが、

社会の現実をきちんと「見る」こと、そして「これからの未来がどうあるべきか共に考える機縁となることを願っています。」

不戦決議

戦争責任を表明

一九八七年四月、それまで勤めていた「戦没者追悼会」を、「全」と「法」の二字を加えて「全戦没者追悼法会」と改称し、同時に宗門近代の検証の取り組みが始まりました。

法会では、古賀制二宗務総長(当時)が「宗門の戦争責任の問題を真正面からとらえ、人を人として語つて戦争を「聖戦」と呼び、聖人の仰せになきことを仰せとして語つた罪を懺悔し、同朋社会の顕現へ向けて具体的な一歩を踏み出す」とし、さらに「全宗門の名において非戦の誓いを内外に向かって宣言できる日」がくることを念願すると表明しました(要旨)。

真宗大谷派「不戦決議」

一九九五年六月、真宗大谷派は宗議会、参議会において「不戦決議」を可決、宗派としての「非戦の誓い」を内外に宣言しました。そこでは「賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意」としてと表明しています。

また、「安穩なる世を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門から見え見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞ふ」とも表明しました。このことは、各教区・各地域での非戦を生きんとした僧侶たちの事績を検証する取り組みにつながっています。

真宗大谷派 不戦決議

私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらした。佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。

この懺悔の思念を旨として、私たちは、人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧(はづ)れることのない、すべての戦闘行為を否定し、さらに賜った信心の智慧をもつて、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意して、ここに「不戦の誓い」を表明するものであります。

さらに私たちは、かつて安穩なる世を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門から見え見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞ふとともに、今日世界各地において不戦平和への願いに促されて、その実現に身を捧けておられるあらゆる心ある人々に、深甚の敬意を表するものであります。

私たちは、民族・言語・文化・宗教の相違を越えて、戦争を許さず、豊かで平和な国際社会の建設にむけて、すべての人々と歩みをとることを誓うものであります。

右決議いたします。

一九九五年六月十三日

真宗大谷派 宗議会議員一同

一九九五年六月十五日

真宗大谷派 参議会議員一同

平和への 罪責

集団的自衛権行使の閣議決定がされた数日後、新聞の声欄に「命捨てろ」と弟に言えない」というある高校生の投書が掲載されました。「国のために命を捨てろ」という言葉を私は弟たちに、これから生まれてくるすべての命に言いたくない。今の世代も未来の世代も共通の思いのはずだ。殺し殺されるために、生まれ、そして生きてきたわけではない」とあります。このような若い世代の人たちの願いに私たちはどう応答していけるのでしょうか。

戦争の罪責は戦争の勃発と同時に起こるものではありません。平和の中で平和に対する罪責の積み重ねが戦争へとつながっていくのです。

過去に生きられた人々の願いを受け、未来に生きるいのちを思い、今ある課題から決して目を逸らしてはなりません。一人ひとりの「私」が背負っていかなければならない。それが非戦・平和の課題です。

耳を澄まし学ぶ

過ちを繰り返す

私だからこそ…

本紙面等、宗派の「集団的自衛権行使容認」反対の動きに関するお問い合わせは、総務部(TEL:075-371-9182)まで

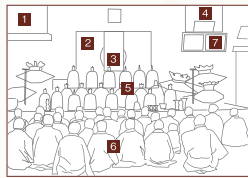


私にとって戦争とは？平和とは？

聖人の仰せになきことを仰せとして ―教団の歩みを訪ねて



「仏具の供出」 所蔵：大垣教区光慶寺



- 1 皇居二重橋の写真
- 2 日の丸
- 3 御本尊
- 4 靖国神社の写真
- 5 供出される仏具
- 6 お勤めをする僧侶・門徒
- 7 戦没者の遺影

正面には、御本尊が掛けられています。その後ろに「日の丸」が重なっています。左上の写真は皇居の二重橋、右上の写真は、この地域から出征し戦死した若者の顔写真と、その上に靖国神社の写真が見えます。この一枚の写真に当時の社会状況がそのまま映し出されています。

寺院も例外ではなく仏具等を供出しました。それらは戦争のための道具となりました。写真の中央、講堂の壇上には、供出用の梵鐘、華瓶、灯籠、台等の仏具が並びます。お参りされる門徒の前に、僧侶たちが並んでお勤めをしています。

ここに一枚の写真があります。
一九四二(昭和十七)年、岐阜県池田町の温知小学校の講堂に集められた仏具の写真です。資源の少ない日本は長引く戦争の中で、「金属類回収令」(一九四一年八月)を出して各家庭から鍋、釜、火鉢、農具などの供出を命じました。

戦争に対して 宗門はどのような対応をしたのか？

一九四二(昭和十六)年十二月、太平洋戦争勃発と同時に宗門から出された「教書」には、「宗門ノ綱要ヲシテ挺身殉国ノ精神ヲ昂揚セシメタリ今や天歩愈々艱難ニシテ皇国ノ安危ハコノ秋ニ在リ須ク金剛不壊ノ信心ニ住シ堅正ニシテ却カズ勇猛精進スベキナリ」と、「挺身殉国(身を挺して国家のために殉ずる)の精神」を強調しています。御影堂門には「皇威宣揚」、「生死超脱」、「挺身殉国」(写真の看板を掲げました)。

一九四三(昭和十八)年には、兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する二十歳以上の文科系学生の徴兵が決まり、学業途中で出征することになりました。

御影堂前の臼洲では大谷派内の出陣学徒の壮行会が行われました。手に銃剣を持つ青年僧侶たちの写真が残されています。

戦争中は、女性もその銃後を支えました。婦人法話会では慰問袋を作成したり、軍用車の献納をするなどの活動を行いました。



「大谷婦人会の銃後活動」



大谷派内出陣学徒壮行式
「真宗」1944(昭和19)年1月号



「挺身殉国」の看板
「真宗」1942(昭和17)年1月号

聖人の仰せになきことを仰せとして

1941年（昭和16）12月8日、日本軍による真珠湾奇襲攻撃により米国、英国、オランダなどの連合国と太平洋戦争が勃発しました。この時大谷派は「法主」の名により「金剛の信心に基づき、勇猛精進すべき時である」という内容の「教書」を出し、僧侶や門徒に向けて「挺身殉国（身を挺して国に殉ずる）精神を昂揚」するよう指示しました。その具体的な施策として教区、組、寺院での「皇民護国講座」の開催、寺院への「建艦翼賛運動」への献金を要請しました。さらに真宗大谷派貯蓄報告組合を設立して国債の償還や軍需産業への融資を推進するため「貯蓄報国運動」を提唱し、具体的な物資をもって戦争への貢献を推進しました。



山門前に掲げた「挺身殉国」の看板

『真宗』1942年（昭和17）1月号
太平洋戦争の勃発直後の1941年（昭和16）12月25日、東本願寺大門前に「皇威宣揚」「生死超脱」「挺身殉国」の大看板を掲げた。



ポスター 貯蓄報国運動

所蔵 教学研究所

1941年（昭和16）当時、国は230億円の貯蓄目標たてたが、実現に及ばなかった。大谷派では、大谷派貯蓄報国組合を設立し、積立貯蓄の方法により貯蓄目標を5000万円とした。



建艦翼賛運動

『真宗』1943年（昭和18）2月号

1941年（昭和16）に公布された金属類回収令により、各寺院から梵鐘、花瓶などが供出させられていたが、さらに各寺院へ「建艦翼賛運動」への^{きまじゅう}献出を求めた。最初は、大谷家関係者らの多額の寄付があり、『真宗』誌において金額と寺院名が公表された。

「特定秘密保護法案」の廃案に関する要望書

私たち真宗大谷派は、かつて戦争に協力した罪責を深く懺悔するとともに、仏教の教えに立ち、戦争を許さない、豊かで平和な国際社会の建設に向けて歩むことを誓いとしております。その教団を代表するものとして、「特定秘密保護法案」に対して深い懸念を表明いたします。

本法案は、すでに各方面より指摘されているように、防衛・外交等に関する事柄についての国民の知る権利を著しく制限するものであるだけでなく、情報を得ようとした者の処罰まで規定されており、国民が知ろうとすることも制限するものとなっています。したがって、該当する事柄について、政府・行政が現在何を行っているのかを知ることができないばかりか、速やかな事後の検証も困難となってしまうことが予想されます。

先の大戦において多くの情報が国民に秘匿された歴史、また今回の東京電力福島第一原子力発電所の事故において多くの情報が公開されなかったことに鑑みると、政府・行政の動きに関する重要な情報が秘匿されることをできる限り制限し、国民の知る権利を守ることが重要でありましょう。したがって、本法案は国及び国民の安全の確保を目的とするとされていますが、それと引き換えに、私たち国民が不信と不安の中に暮らさねばならない状況を生み出すものと考えます。それが真に豊かで平和な社会であるとは思われません。

私たち浄土真宗の門徒が願う阿弥陀仏の国土は、あらゆる存在をひとしくおさめとり、安らぎを与え、養う世界であると教えられています。その願いに背いて戦争に協力した教団の歴史への反省に立つとき、この法案が、現在そして未来にわたって、人々の安らぎを奪うに違いないことを深く憂慮せざるをえません。

現在、震災及び原発の問題や経済・国際問題など、国民の多くは大きな不安を抱えながら生活しています。国は、公明正大に国民の信頼にこたえ、人々の不信や不安を除くことを責務とするべきであります。本法案は、その責務に背くものであり、深い懸念を表明するとともに、速やかに廃案されるよう強く要望いたします。

2013年11月27日

真宗大谷派宗務総長 里雄 康意

安倍晋三内閣による集団的自衛権行使容認に対する反対声明に係る宗務総長コメント

今回、安倍晋三内閣は、集団的自衛権行使容認を閣議決定しました。この重大問題を抱える「現代」に生きる私たちは、今こそ仏法僧の三宝に帰依する「仏教徒」として、この問題から目をそらすことなく、正見に依って的確に受けとめ、言動する使命と責任があるのではないかと思います。


仏教では、「国豊民安兵戈無用」という教言に象徴されるとおり、仏の教えが生きてはたらくところにこそ、ほんとうに豊かで、戦争の無い世界が開かれると教えられます。それは、『仏説無量寿経』において教示される如来の本願に、どこまでも照らし出され、呼びかけられ続ける「われら」の問題であり、この私たちに、真に「われら」といえる世界が如何に成り立つのかという課題であります。

親鸞聖人が頭かにされた浄土真宗の教えは、自己関心に執着してみずからの愚かさに気づくことのできない私たちに、如来の本願に基づいて、人と生まれた意義を教え、丁寧な人間関係を開いてくださるものです。自らの正義に酔いしれ人間の関係と存在そのものを破壊する戦争をも正義の名の下に容認する。このような自分を善とし他を悪とする愚かな在り方に、目覚めなければならないと教えてくださるものこそ、南無阿弥陀仏であります。

こんにちの日本政府の判断はまさしく国民の危機であり、私たち一人ひとりが、みずからの課題として受けとめるべきものです。この問題のなかにこそ、私たちは、自他一如を説く仏の教えを聞き開かなければなりません。あらためて、一人ひとりが、今、浄土から、どのように呼びかけられているのか。何を教えられ、うながされているのかを、それぞれの生活の現場で語り合い、共に「同朋社会の顕現」に尽くしてまいりたく存じます。

2014年7月1日

真宗大谷派宗務総長 里雄 康意



不 戦 決 議

私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国のひとたちに、言語に絶する惨禍^{さんか}をもたらし、仏法の名を借りて、将来ある青年たちを死^{おもむ}に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。

この懺悔の思念を旨として、私たちは、人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧^はじることのない、すべての戦闘行為を否定し、さらに賜^{たまわ}った信心^{ちえ}の智慧^おをもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意して、ここに「不戦の誓い」を表明するものであります。

さらに私たちは、かつて安穩^{あんのん}なる世を願い、四海同朋^{いつく}への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門からさえ見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞うとともに、今日世界各地において不戦平和への願いに促されて、その実現に身を捧げておられるあらゆる心ある人々に深甚^{じんじん}の敬意を表するものであります。

私たちは、民族・言語・文化・宗教の違いを越えて、戦争を許さない、豊かで平和な国際社会の建設にむけて、すべての人々と歩みをともにすることを誓うものであります。

1995年6月13日 真宗大谷派 宗議会議員一同

1995年6月15日 真宗大谷派 参議会議員一同